劉再復『人物の性格の二重組合せ原理を論ず』『文学の主体性を論ず』の読後レポート

江上 幸子

劉再復の文学理論面における仕事ぶりはエネルギッシュで、その膨大な論文はとても私の読みこなせるものではない。ここでは、『人物の性格の二重組合せ原理を論ず』（『文学評論』1984-3、以下『二重組合せ論』と略）と『文学の主体性を論ず』（『文学の反思』1986.11 所収、以下『主体性論』と略）という代表的二論文を読んだ限りで、感じたところをレポートしたい。

彼の論文には大きく言って、次の二つの面での成果がある。第一は、これまでの中国の文学理論に見られた様々な束縛に対し、鋭く的確な批判を加えている点である。第二は、単に批判を加えるのみでなく、新たな理論を提示すべく積極的な模索を続けている点である。そして彼の批判と模索は、主に三つの方法によって行われているように思われる。a）これまでの中国ではあまり援用されなかった、西洋の新旧の文学理論や科学理論を援用する。b）これまでの中国の「反主流文学理論」を下敷きとする。c）文革後の中国の人・美・文学に対する新たな「世論」を背景に、詩人としての自己の文学的感性や、創作時の実感・体得などを尊重する――の三つの方法である。

第一の束縛への批判という面について言えば、文革後の文学評論分野において少なからぬ人が成果をあげていると言えよう。しかし、同時に第二の新たな論の提示への模索のあとを示しえている論者は、まだ少ないと言わざるをえまい。劉再復の新たな論の提示は、二論文を見る限りでは、これまでの中国の文学論の誤りを正し不備を補いえたとまでは言い難いように思われる。しかし、中国の文学理論の基本的な問題や思想に対し、上の三方法の駆使によって新たな思考角度を示し、かなりのインパクトを与えていることは確かだろう。また彼の第一の面の批判は、攻撃的姿勢あるいは特定の対象への対決的姿勢をあらわにしたものではなく、第二の面の提示をする中で、側面的にこれまでの欠陥を照らし出そうとするものである。例えば、『二重組合せ論』の根底には、これまでの中国の文学作品にしばしば見られた、人物の性格の単一化への批判があり、『主体性論』の根底には、同様の機械的反映論の影響に対する批判があ

る。こうした工夫のある批判の仕方は、教条主義的反論の回避に多少は有効であるかもしれず、やはりまた彼の論の特徴だろう。

彼の三方法のうちのａ）は、新たな思考角度を作るための着想において効果をあげてはいるものの、説得力のある論を作るという面では、さほど大きな効果をあげていないように思われる。ｂ）の点では、彼の論には胡風の『文芸問題に対する意見書』（『意見書』と略）や何直の『リアリズム――幅広い道』（『幅広い道』と略）などとの共通点がかなり見られる。彼の批判と提示は、解放後の中国文学に対する、胡風や何直らと同じ問題意識から出発しているのではないだろうか。過去の成果を全面否定しがちな傾向もある中で、この点は私には好ましく思われるが、同時にやはり、かつての理論と比べた時の新しさが問われねばならないのは当然だろう。ｃ）について言えば、結論が先になるようだが、この点が彼の論の、胡風や何直と違う特徴であるように思われる。そこで以下に劉再復の文学論を、胡風・何直の文学論と見比べてみたい。

先に劉再復の論文から、第一の批判の面を見てみよう。『二重組合せ論』において彼は、上にも触れたように、中国の文学作品中の人物性格の極端な単一化・固定化――英雄は最初から最後まで英雄、階級敵は階級敵という――を批判しようとしている。彼はまず、中国に古典文学時代から根強くあるとされる「善人は完全な善、悪人は完全な悪」という「美醜対照手法」を指摘する。そして、最近の中国ではこれに「政治突出」「階級主義」の論が加わったために「政治ロジックによる排中律」が強まって、文学の「単純化・概念化」がもたらされ、文学は人間不在の「神と悪魔の闘争」の場となってしまった、と説いている。

『主体性論』においては、これまでの中国では「環境決定論」や「階級性」の過度の強調により、人間の「精神的主体性」（意志や感情の力、歴史創造の力）の力強さと多様さが軽視されてきた、と彼は主張する。そして、これは文学面での「機械的反映論」につながり、１）作中人物は個性がなく、また人物の内心世界が描かれずに外部現象の描写に終始している、２）作家も主体性をなくし、個性の改造と時期ごとの政治観念への適合に努めるばかりで、「現実の審美的再創造」に努めていない、３）読者は受動的反映者と見られ、思想的概念を注入し即効的な社会効果をあげることが強調され、作品の単純化をもたらしている、４）批評家も文学の特殊法則を軽視し、作家の感情や多様な生活・表現方式を理解しない、と批判している。

続いて彼の論文から、第二の新たな論の提示の面を見てみたい。『二重組合せ論』で彼が提示するのは、人の性格は善と悪・真と偽・美と醜といった、二

極の組合せでできているということである。そしてこの組合せのされ方は、空間的（環境など）・時間的に変遷するものであり、と同時にまた、統一性を持つものでもある。すなわち、人間は常に自我分化〜自我克服〜自我統一の過程を経るのである。ゆえに作家は、この「多様かつ統一」「万殊かつ一貫」の性格をうまく描かねばならない。つまり、性格の二極の組合せ具合をうまくつかむとともに、作家の先進的世界観と社会的責任感とでこれを統一させるべきである、というのが彼の主張である。

『主体性論』では、作家も、作品の人物形象も、そして読者も、人間の「精神的主体性」を取り戻さねばならない、と彼は言う。まず人物形象の主体性とは、人物形象が作家の意図を越えて、自己のロジックで動き出すこと（これを「二律背反」と言う）であり、作品はこうなって初めて成功する。次に作家の主体性には、低レベルから順に「生存要求」「安全要求」「帰属要求」「尊重要求」「自我実現要求」の五レベルがあり、作家は創作実践を通して低レベルから順に高レベルへと克服していかねばならない。最高の自我実現とは、時代・社会・人類と相通じたものであり、すなわち「愛」である。また、作家の自我実現には社会的責任つまり歴史的使命があり、それはすなわち「天下に先んじて憂う」という人道主義であるべきである。ゆえに作家はこの「憂い」を書くべきである。最後に、欠陥の多い現実に置かれている読者は、往々にして主体性の喪失を意識しない。だが、彼らを文学という「審美世界」に入れることで人間の本質を還元させることができる。しかしそれには、「審美心理構造」（充分に説明されていないが、人間が本来的に持つ美しいものを求める心、とでも言うものらしい）という読者の側の主体的条件が必要である。また、高級読者である批評家も批評活動を通して、作家の意識しないものをも意識させると共に、自己の「審美心理構造」を再創造すべきである。彼はこのように三つの面の主体性について述べたあと、リアリズムの歴史を論じて、それを「早期リアリズム」「批判的リアリズム」「社会主義リアリズム」「一九七〇年代ソ連の開放体系」に時期区分する。そして社会主義リアリズムとは、「真実に、歴史的・具体的に現実を書くこと」と、「思想的に労働人民を改造・教育する任務」との結合を作家に要求するものであるとした上で、その問題点は、作家の主体性を政治面においてのみ考え、審美面においては考えていないところにあるとしている。また「一九七〇年代ソ連の開放体系」は、「客観と主観の強調一致」を主張するが、これは充分に正確ではなく、重点を客観性の問題から主体の能動性の問題へと移すべきである、としている。

それでは胡風の『意見書』はどうだろうか。彼はここで、リアリズムをめぐ

る自己の意見を論じ、中国の文学者には「五本の刀」がつきつけられていると批判した。「五本の刀」とは「世界観」「労農兵の生活」「思想改造」「民族形式」「題材」である。彼は、これらを作家に先行的に強要する中国文学界の指導のあり方を批判した上で、最も問題なのは文学界の「セクト主義」だとした。竹内実氏は胡風の理論を、「世界観とリアリズムの不一致を認める」「リアリズムを唯一最高の命題とする」論であるとしている。つまり、彼のリアリズムをめぐる主張は当時の、「創作方法と世界観は一元的でしかありえない」「リアリズムには様々に異なる階級性がある」「旧リアリズムと社会主義リアリズムには根本的区別がある」「主観精神の強調は反リアリズムである」といった論を批判したものである。そして彼は、竹内氏の整理を借りれば、リアリズムの根底に「主観の燃焼」論を据えた。「主観の燃焼」論とは、人間の「現実に対する反応の主観的作用」を強調することであり、これはまた、「作家の主体性は不断の自我拡張」であるという「自我拡張」論につながっている。そして彼の論のもう一つの柱は、人間が持つ「自然発生的反抗精神」を重視することである（竹内実『中国――同時代の知識人』1967.5、『現代中国の文学』1972.2による）。こうした胡風の批判と理論は、劉再復の「機械的反映論」の批判や「精神的主体性」重視の主張と、かなり共通しているのではないだろうか。

次に何直の『幅広い道』を見てみよう。彼はここで、中国文学の持つ問題を主に次の三面から批判している。第一はシーモノフの第二次作家大会報告に同意するという形で、リアリズムに「社会主義精神による人民の教育任務」を別個に付け加えることが、作品の「政治概念のメガホン化」を招きやすいと批判している。第二は、社会主義リアリズムの「庸俗的理解」から生まれた中国の「政治服務」の問題を取り上げ、「時々刻々の政治任務と結合しているか否かを文芸の最重要規準とする」論、及びそれに基づく行政干渉を批判している。第三は、人物形象が忘れられていると指摘し、「新人物・労農兵を描け」「当面の宣伝作用重視」という主張が「無葛藤論」「題材縮小」「公式化」「独創性の欠如」につながるとしている。そして彼は胡風とよく似て、「世界観は決して作者の創作活動を決定する唯一の条件ではない」とした上で、現実に積極的に立ち向かうことを原則とした、多様性を認める「幅広い道であるリアリズム」への回帰を提起する。また中国文学の発展のために、作家の独創性を重視し、政治服務や思想性を広く考え、色々な教条のわくや、作家の多様性を無視した行政指導を排除しようと主張する。何直のこうした、人物形象の重視や作家の独創性・多様性の重視、安易な社会効果の強要や政治ロジックの介入への

批判は、やはり劉再復とかなり共通しているように思われる。

それでは、劉再復と胡風・何直二者との相違点は何だろう。まず目につくのは、二者がセクト主義・行政指導の排除というように、文学界の指導のあり方への批判を強く打ち出すのに対し、劉再復にはそれがさほどないことである。これには恐らく、文革を経て文学界の「指導理論」の教条化の弊害が広く明らかになり権威が落ちたこと、その反省から現在は一応「創作の自由」が許容されていることが背景にあろう。だがその一方には、作家や批評家側にもかつての教条化した理論の影響から抜け切れぬ面が残り、作品や評論になお従来と同様の弱点が見られる、という文革後の現状がある。劉再復が論を進めるとき強く意識したのは、指導の問題よりむしろこの作品の現状であったかもしれず、ある意味ではこれが劉再復に、二者以上の新たな難しさを負わせたといえるかもしれない。そしてその結果であろうが、劉再復の主張の中には、作家や批評家に対する道徳的あるいは抽象的な要求が散見されて、疑問を覚えずにはいられない。例えば、「低レベル」の主体性を「克服」して「高レベル」に達せよとの作家への要求には、個人の意志の力を過大評価した、多分に道徳的なにおいを感じるし、「愛」「人道主義」「審美的再創造の力」「審美心理構造」といった言葉で作家・批評家・読者に要求されているものは、あまりにも抽象的である。

次に気が付くのは、二者の主張がリアリズム論として論じられているのに対し、劉再復も恐らくリアリズム論への問題意識を持ちながら、それを正面から論ずるのでなく背後に回していることである。これは教条的批判を回避する工夫でもあろう。だがこの工夫が同時に、リアリズムと世界観の関係、批判的リアリズムと社会主義リアリズムの違いなど、中国の文学理論の基本問題に対する追及が不充分に終ってしまう、という欠点をも生んでいるように思われる。一例をあげれば、批判的リアリズムと社会主義リアリズムの関係について明確に論じることなしに、彼はそれを時代区分として認めてしまっている。この二つのリアリズムの間に明確な線を引くのは難しい、と主張した何直が、線を引くことによって社会主義リアリズムに肯定的リアリズムの要素が強まり、無葛藤論につながることを懸念していたのであることを、彼も見落としているわけでもなかろうと思うのだが。もう一例をあげれば、彼が「二律背反」として論じる作者の意図と作中人物との食い違いも、その一部分は実は、「リアリズムと世界観の関係」の問題ではないのだろうか。この「二律背反」については、彼自身の説明も不十分で理解し切れない点が多いが、恐らく、彼の言うような作中人物の主体性を重視するか否かの問題ではないだろう（作者を完全に離れ

た作中人物の主体性などありえまい）。むしろ「二律背反」現象の一部分は、作者の理論的認識と、作者が現実の中で観察する事実との食い違いという問題であるように思われる。もしそうであるとすれば、彼が「二律背反」の度合が大きいほど文学作品がおもしろいと主張することは、「世界観とリアリズムの不一致を認める」という胡風らの主張を越えて、不一致であるほど作品は成功するとの主張であり、私には或はこれが、劉再復の主張の最も大胆な点ではないかとさえ思われる。だが、彼はリアリズムの問題を正面から論じようとはしないため、「二律背反」の主張にも不明確さが残ると同時に、別のところでは（『二重組合せ論』の最後の部分）、人物の性格を作家の「先進的世界観」で一元化すべきなどと、問題多い言葉を不用意に使ってしまってもいる。

では劉再復の論の特徴はと言えば、胡風・何直二者が「幅広い」リアリズムへの回帰を主張したのに対し、「人間」や「美」への回帰とでもいうものを主張する点ではなかろうか。彼はしきりに「文学は人間学である」「人間を文学の中心にせよ」「人間を歴史の主人にせよ」「真に人間をもととせよ」と主張している。また『主体性論』では、人間の「能動性・自主性・創造性」や「愛」の力、「人道主義」的精神、「審美心理構造」などが強調され、それらは人間が「審美情境」（ここでは文学をいう）に入ることにより、自然に力を発揮するものと、かなり楽観的にとらえられている。劉再復のこうした論は、文革時のような教条化ももたらしうるこれまでの理論のみに依存するより、もう一度現実の人間が一体どういうものかを見直すところから文学を考え直してはどうかという主張であろうし、その根底には、人間の本来持つ力に対する楽観的な信頼があるのではないかと思われる。そしてこの現実の人間に戻れという主張は、リアリズムに戻れと言うよりわかりやすさもあり、一面では確かに幅広い共感を呼んで、二者になかった効果をあげているようである。また『二重組合せ論』では、この主張に基づき人間そのものの追及がされているようだが、この面の追及は例えば何直より一歩踏み込んでいると言えよう。

しかし劉再復の「人間への回帰」の主張は、新たな問題をも生んでいよう。その一つは、個人が持つ力への彼の楽観が過大すぎるのではないか、という点である。彼の楽観は恐らく、教条化した「理論」より一人一人の「人間性」の方がまだ頼りえた、人間には階級性だけで割り切れぬものがあったという文革時の実感や、人間の本来の力は文革への反省を経て、新しい価値観や美意識を生み出し、それらは「世論」にまでなった（例えば『クラス担任』の謝恵敏が奇形であると広く認められるなど）という体験に根ざしたもの、と理解はできるのだが・・・。劉再復の人間への楽観は、上にも触れたが、胡風とかなり共

通するところがある。胡風が理論の根底に人間の「自然発生的反抗精神」を据えたのに対し、劉再復は「人間が本来的に持つ、美に向かおうとする力」とでもいうものを据えようとしているらしい。両者のこうした主張は共に、「階級決定論」などの、外的条件を重視する論の行き過ぎを睨んでなされている。しかし、外的条件に対する人間の内在的力への評価の度合は、両者の間で若干違っているような気がする。つまり胡風の場合は、不当に軽視されている人間の内在的力を、外的条件と同程度に重視せよとの主張であるように思われるのに対し、劉再復の場合は、外的条件より以上に人間の内在的力を重視せよとの主張であるような感を受ける。例えば、彼がリアリズムの時代区分で「一九七〇年代ソ連の開放体系」を取り上げた際、「客観と主観の協調一致は完全には正確でない」として、「重点を知識の客観性の問題から主体性・能動性の問題に移」し、「反映論から主体論に移る」ことを主張している部分などがそれである。また胡風は、客体の制限の大きなものを克服するほど主体に大きな力が生まれる等と、外的条件そのものや外的条件と内在的力との関係についてもかなり論及しているのに対し、劉再復の論にはそれがほとんどない。文学に人間が描かれるべきことは当然だが、しかしやはり、人物の描写を通して「人類」や「社会」や「歴史」の抱える問題が照射できてこそ、作品はよりおもしろくなるのではなかろうか。そういう意味からも、外的条件の問題はやはり避けて通れない問題であるように思われる。

その二は、文学論を「人間論」にしたことが、現在の科学でも解明し切れない問題を逆に抱えこんでしまい、理論の曖昧さや弱点を生んでいるのではないか、という点である。例えば人の性格の二極への分類は、性格の複雑さの主張としては同意しえても、その分類の仕方にはやはり、これまでの道徳観念のわくを越ええない弱点を感じさせられてしまう。また、彼が最も尊重する「審美心理構造」にしても、つきつめていけば結局「世界観」と言うのと変らないものではないか、との懸念が残らざるをえない。その三は、私の杞憂であればいいが、「人間」「美」といった大問題を追及し積極的に新しい文学論を立てることが、新たなわく（場合によっては教条にも変りうる）を作りはしないかと危惧されることである。最近の中国文学はまだ問題点も多いとはいえ、私達の予想をこえる速さで次々と新しい意義を持つ作品が生まれている。張賢亮の自伝的小説、戴厚英の『ああ、人間』、莫言の作風など、劉再復の主張する「人間を描く」面での成果も決して小さくない。理論より作品先行の感がある最近の状況の中では、何直のように新たなわくを作らないことを重視し「幅広いリアリズム」の提起に留める禁欲も、あるいは必要かもしれない。

（１９８８．１．執筆、１９８８．７．一部修正）